

私学の魂

聖園女学院中学校・高等学校

一人ひとりがミッション(=生き方)に気づけるよう、生徒のハートに火が着く種まきと声かけで感性と自己肯定感を高め、互いに認め合う心も養う和やかに一歩ずつ進化するカトリック系女子進学校

藤沢市の中心部からほど近く、野鳥たちがさえずり、四季の草花が咲きこぼれる広大な緑の丘陵地に、聖園女学院のキャンパスがあります。1920（大正9）年に創立された聖心の布教姉妹会によって、戦後まもない1946（昭和21）年に旧制高等女子学校として創立されたカトリック系女子校は、その後1948（昭和23）年に聖園女学院高等学校と校名を変え、聖園女学院中学校を併設しました。湘南の風を身近に感じる高台で、「知る人ぞ知る」家族的で温かな校風の女子校としてファンや卒業生に親しまれてきた同校は、いま、静かな“進化”を遂げつつあります。今回は、2017年4月から校長に着任したミカエル・カルマノ先生をはじめ、教頭の下里由香先生、入試広報部長の鐵尾千恵先生にお話を伺いました。



校長のミカエル・カルマノ先生

DATA

1

聖園女学院中学校・高等学校

沿革	1920（大正9）年	聖心の布教姉妹会創立
	1946（昭和21）年	聖心の布教姉妹会によって旧制高等女子学校創立
	1948（昭和23）年	学制改革で聖園女学院高等学校に名称変更
	1976（昭和51）年	中高6ヶ年完全一貫教育開始
	2006（平成18）年	マリアホール（文化体育施設）完成
	2015（平成27）年	イエスの聖心聖堂（みこころせいどう）完成
	2016（平成28）年	学校法人南山学園と合併
	2017（平成29）年	「総合型入試」を新設 4月から前南山大学学長ミカエル・カルマノ校長着任
	2018（平成30）年	「英語入試」を新設

校長 ミカエル・カルマノ

所在地 〒251-0873 神奈川県藤沢市みその台 1-4
TEL：0466-81-3333（代表）
<http://www.misono.jp>

交通 小田急江ノ島線「藤沢本町駅」下車徒歩約10分。「善行駅」下車徒歩約15分。

2016年、学校法人南山学園と合併し、南山大学を34年にわたり支えてきたミカエル・カルマノ司祭が校長に着任

まだ20代のときにドイツから日本を訪れ、大学で学び、以来34年にわたって名古屋の南山大学で教育に携わり、学長も務めてきたミカエル・カルマノ司祭が、2017年4月から、この姉妹校・聖園女学院の校長に着任しました。

「私自身は、アメリカで教育学を学んだ後に南山大学に赴任して、ドイツとアメリカの教育の共通点や、日本の文部科学省の定める『学習指導要領』の研究をしてきました。

日本の中学・高校の生徒はとても真面目ですが、ちょっと大人しいように感じます。たとえば最近の『PISA』の学力テストで、フィンランドは最も上位ですが、授業中はもっと騒がしい(笑)。日本の生徒は、もっと反応や発言をしたほうがいいですね。それが聖園女学院に来て感じたことです」とカルマノ先生。

現在、日本国内にあるカトリック系の大学には女子大が多く、共学の総合大学は、東京の上智大学（イエズス会系）と、愛知の南山大学（神言会系）の2校のみですが、その附属中学校・高校である南山女子部は、東海地区では最難関校であり、南山男子部も人気校のひとつです。

そして、その南山大学の学長を長きにわたり務めてきたのが、新校長のミカエル・カルマノ先生です。2016年に聖園女学院が学校法人南山学園と合併したご縁によって、翌2017年にカルマノ先生はこの藤沢の地の女子校にやってきました。

「いまは授業では、高校3年生の『宗教』の時間を担当しています。たとえば『自分は何を信じるか?』

といった、正解のない問いを立てて、生徒に考えてもらっています。生徒自身が考えるには、答えがない問いがいちばん良いからです。

その一方で、生徒には『何を教えてほしいか?』アンケートを取っています。いろいろな質問があって面白

いですよ。キリスト教に関する素朴な疑問としては、『ミサって何ですか?』とか『シスターはどういう生活をしているのですか?』とか…。中には『進化論について』質問してくる生徒もいましたね。でも、他愛無いことであっても、疑問を持って考えてくれることが大切なのですね」とカルマノ先生はいいます。

こうした時間に、哲学的でもある問いや質問を交わしていくなかで、生徒一人ひとりが「どう生きるべきか?」という自身の“ミッション”=生き方に気づいてくれることを、同校の教育では大切にしているといいます。

全学年の生徒が1人1台のiPadを持ち、学校生活のいろいろな場面でICTを活用。校内には通信キャリアのアンテナも!

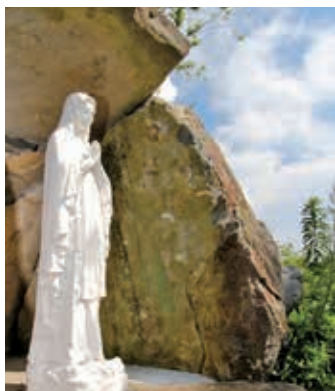
いま「2020年大学入試改革」を境に、大学入試のあり方と日本の教育が大きく変わろうとする節目を迎えています。カルマノ先生は、今後の教育をどう考えているのでしょうか?

「いまはインターネットがあるので、とても便利ですね。たとえば私は48年前の若い時に日本にきました。その当時は、日本に行ってみなければ、日本のことを良く知ることができませんでした。いまは机に座っていても、インターネットで海外の国について何でも調べることができます。ただ、大事なことは、やはり体験してみることです。確かにスマートフォンも便利です。でも、一方では、生活のなかで一刻もスマホを手から離せない生徒の学力は、やはり低下しがちだという実験結果もあります。だから本校では、校内ではスマホを使わずに、1人1台タブレットを持って授業に活用しています」と校長のカルマノ先生。

インターネットやスマートフォンの功罪もきちんと認識したうえで、一方ではICT機器を上手に学校生活や学習のなかで有効活用していくことが大事だと、カルマノ先生をはじめ聖園女学院の先生方は考えているようです。

「本校では、すべての学年の生徒にiPadを持たせて2年目になります。新たな大学入試のあり方にも対応できるよう、中学1年生から『eポートフォリオ』への記録と活用も始めています」と入試広報部長の鐵尾千恵先生は言います。

「いまでは、キーノートを使ったプレゼンで学内コンペも行っています。自分史を書いたり、新製品を考えたり、ESD(持続可能な開発のための教育)についての考えを発信・共有したり、様々な場面で生徒はiPadを活用しています。英語のプレゼンの練習するとき



カトリック校である聖園女学院では、生徒の学校生活を校内各所のキリスト像、マリア像が見守っている。

も便利ですよ」と教頭の下里由香先生が現在の活用状況を教えてくださいました。

「導入した当初は、授業中に生徒が一斉に iPad を使い始めると、インターネットへの接続に時間がかかってしまうこともあったのですが、その後はキャンパスの敷地内に、このエリアで共有のソフトバンクのアンテナが立ったことで、すいすいつながるようになりました」と下里先生。

広い敷地を生かして、地域にも貢献できる共用アンテナの設置スペースを通信キャリアに提供することで、生徒のためにも生かすという、その柔軟な発想と決断には、少し驚かされました。

いまは全国の学校教育の現場で「ICT 教育」が重視されるようになっていますが、全学年の生徒に一斉に iPad を持たせるようにした女子校は、現在でも珍しい存在です。決して派手な教育改革を掲げる訳ではありませんが、次世代に必要な教育やスキルを身に付けられるよう、ときに果敢な改革を他の私学にも先駆けて展開できることも、聖園女学院の魅力のひとつでしょう。

「ただし、最初のうちはやはり紙の本に親しむことを大切にしています。図書館の利用状況も本校はとて高いです。ここも窓から外の緑が見えて居心地が良く、漫画なども置いてあるので生徒に人気の空間です」と下里先生は話してくれました。



窓から緑が見える図書館には漫画も置いてある、在校生にとって居心地の良いスポット。

自然の風を感じられる緑豊かな環境と、居心地の良い校内のスポットで語り合い自身の“ミッション＝生き方”を考える

聖園女学院の魅力のひとつに、湘南・藤沢エリアの高台に広がる豊かな緑に囲まれたキャンパスの自然環境があります。校内の各所に咲く花々や植物を身近に学校生活を送ることで、数字や形では表せない、瑞々しく豊かな感性を養うことができます。

取材の折に放課後の教室や校内の施設を見せてもら



教室の窓からも周囲の緑が眺められ、四季の自然を肌で感じることができる。

いましたが、教室の窓からも眺めることのでき、日々の学校生活を彩ってくれる校内の自然環境は、きっと卒業後にも聖園女学院 OG の心に残るものになるでしょう。

「校内の施設も、この数年で新たにになり、生徒が気持ちよく毎日をご過ごせる環境が、いっそう充実してきています。2006（平成 18）年に完成したマリアホールと呼ばれる文化体育施設は、多くの場面で活用されていて、1階のラウンジは在校生に『居心地が良い』と人気のスポットになっています。2015（平成 27）にはキャンパスの一角にイエスの聖心聖堂（みこころせいどう）が完成。成人式の日には晴れ着姿の卒業生が集い、校長先生の司式による『成人のミサ』が行われます」と、校内の施設を案内してくれた鐵尾千恵先生。聖堂はまだ新しい木の香りで包まれていて、確かに心静かに落ち着けるミッションスクールならではの施設と感じました。

教員室の上の質問スペースは、放課後などに先生に質問したり、じっくりと相談に乗ってもらえる場として、とくに入学間もない中学生や、進路を考える高校生が集まっているといいます。

「こうして、日常的に教員が、生徒一人ひとりと落ち着いて向き合う時間や空間を大切にしてきたことが、聖園女学院の特徴でもあると思います。たとえば、自分の思いや考えを発することが得意ではない生徒がいても、場合によっては筆談をとおして、その生徒の思いを受け止めることもあります」と鐵尾先生は言います。

「一人ひとりの生徒は、必ず誰もが生まれながらに授かった宝物（タラント）をもっています。それを教員が理解し、見守ってあげることができれば、個々の生徒の自己肯定感が高まります。そういう雰囲気がある学校だから、卒業生の多くが、お嬢さんの進路として、この聖園女学院を選んでくれるのだと思っています」と下里先生。

「一人ひとりの人間には“ミッション（＝使命）”があ

ります。それを見つけるのがミッションスクールです。神様からいただいた生命を、他者や社会のために生かすために、自らの生き方に目覚めることが、この多様な中高の6年間で最も大切なことです」と校長のカルマノ先生が教えてくれました。

「本校では伝統的に音楽教育を大切にしています。たとえば合唱でも違ったパートがあるからこそ、美しいハーモニーができます。“一音入魂”を掲げる熱心で優

秀な音楽科の教員が本校にはいるのですが、いつも生徒には『自分が歌うことも大事だけど、人の音を聞くことも大事なのよ』と話しているのだそうです。ハンドベルやキャロルも聞き応えがあるものです。発表会では、市民の方も予約なしで聞くことができ、毎年人気を集めています」と



教頭の下里由香先生

下里先生。
つまり個々の生徒は一人ひとり違った個性や才能など“宝物”を持っていて、それらが集まり、互いに響き合うことで、より美しく楽しい生徒同士のチームや学校、身近な社会、そして世界をつくっていけるということなのでしょう。

「2020年大学入試改革」をきっかけに、今後大きく変わっていく大学入試や将来の社会で求められる力には、「協働性、多様性、創造性」が挙げられています。聖園女学院では、そうした資質や姿勢、感性を、日々の学校生活のなかで、自然と身に着けていくことができるようです。

「生徒のハートに火を着ける」 種まきと声かけを常に大切にして、 あきらめない心を培う！

さらに、この数年、海外での語学研修も充実したものになっているといえます。

「実は本校では、修学旅行などの際に飛行機が解禁になったのは2000年からです。この年からスタートした高1のカナダ研修が今年で19年目を迎えました。これは高1の希望者を対象に、7月下旬から2週間、カナダのオンタリオ州ウインザー市で実施しています。1人1家庭にホームステイしながら、英語研修、ボランティア、地元の高校生との文化、スポーツ交流などを体験するものです。

2014年度からは中3を対象にしたニュージーランド中期留学を行っています。期間は1月中旬から3月



ホワイトボードを使って「ちょこっと補習」も受けられる相談コーナー。

末までの2ヵ月半で、ニュージーランドでの第1学期にあたります。国内最大都市のオークランドでホームステイをしながら、最初の2週間は市街の語学学校に通い、その後、現地のカトリック女子校に通学します。希望者には作文、面接の他、英検準2級以上という条件が課せられます。英語力の向上はもちろんですが、異文化体験、精神面での自立をめざします」と下里先生。

「この初年度のニュージーランド中期留学に行った生徒が、現在は大学1年生になっています。初年度ということで、先輩から話を聞くこともできず、不安だったようですが、同学年で協力し合い、充実した経験をし、帰国後は進路に向け他の生徒たちより早いスタートが切れたようです。さらにロータリーの青少年交換に合格し、台湾へ一年留学した生徒もいました」と下里先生は当時を振り返ります。



入試広報部長の鐵尾千恵先生

昨年度は12名が参加したこの中期留学には、今年は過去最多の21名が参加する予定だそうです。

「自分で体験し、壁にぶつかって、そこから何かを感じ取ることが一番大事です。海外研修や留学は、たとえ壁にぶつかっても、きっと良い体験になるはずですよ。さまざまな壁や文化の違いにぶつかって痛みを知ることで、相手を理解し、自分も理解してもらえるように努力する、その経験が貴重なんですね」と校長のカルマノ先生も、自らのご経験もふまえて話してくれました。

「カナダではトロントの日本領事館の女性領事を表敬訪問し、次世代を担う生徒たちに励ましの言葉をいただきました。また、ウインザー市の市長さんは毎年生徒たちを歓迎してくださるだけでなく、5年に一度の藤沢市訪問の際は聖園女学院を訪問してくださいませ。昨年の訪問時の通訳は聖園の卒業生でした。卒業

生といえば、最近では源氏物語の現代訳を完成させた人、ミュージカル・ライオンキングの女王役を務めている人など、各分野で才能を開花させています」と下里先生は言います。

「そういう様々な体験や、先輩たちの活躍を参考に、“あきらめない心”を培ってほしいですね。あきらめなければ、自分自身が好きなことがやがて仕事になるかもしれません。いつどこで、生徒のハートに火が着くかは、みんな違うのでわかりません。でも、その瞬間を見逃してはいけなくとえています。生徒はそのタイミングで、何かのサインを私たち教員にも送ってくれている気がします。そのためにも、私たち教員は『生徒のハートに火が着く』種まきや声かけを欠かさずしていくことを大切にしています」と下里先生。

どうやら、この「ハートに火が着く種まき」こそが、聖園女学院の教育のなかで、とても大切にされていることであり、生徒の自己肯定感を高めつつ、自立や覚醒を促すきっかけになっているようです。

ちなみに聖園女学院の校章は、キリストの聖心のシンボルであるハートを中心にして、4つのバラがこれを囲んでいるものです。ばらの花はキリストの愛を表現し、ハートの十字架はキリストの愛の広さ、深さを表現したものです。

いつでも、どこでも、誰とでも チームを組んでプロジェクトを成功させ、 世界を、地元を、豊かにする力を！

聖園女学院の「生徒のハートに火が着く種まき」は、学校生活のさまざまな体験のなかでも、自然な形で行われています。

「たとえば、助産師さんを招いて毎年高1を対象に行っている『愛といのちの研修』では、すべての子どもは『生まれてきただけで100点満点』だということを感じることで、自身の自己肯定感も高まります。また学



校に隣接する『聖園子供の家』で、子どもたちと一緒に過ごし、遊びや体験を分かち合うことで、奉仕の喜びを知ることができます。希望者を対象に2017年から始めた、心身のハンデキャップを持つ方々と触れ合う『小さき花の園』でのボランティア活動では、生きる喜び



「TPW (TEAM PROJECT WORK)」でのチームビルディングで「いつでも、どこでも、誰とでも」チームを組める素地をつくる！

を体感させていただいています」と鐵尾先生。

こうした経験をした先輩の声や、実際に聞く園児の声が、その後の自分の生き方に大きく影響したという生徒もいるといえます。

「いつでも、どこでも、誰とでも、そしてどのような状況であっても、お互いの声に耳を傾けながら、ともに支え合って過ごしていくことができれば、それは最も価値ある生き方になりますよね」と校長のカルマノ先生も言います。

実際に、聖園女学院では「『いつでも、どこでも、誰とでも』チームを組んでプロジェクトを成功させ、世界を、地元を、豊かにする人生のスタート!」という言葉や、すべての教科、体験、進路を考えていくプログラムの目的に掲げています。

たとえば、「TEAM PROJECT WORK」は、中1から高2まで全員が1年かけて取り組むチームプロジェクトです。チームビルディングに始まり、チームディスカッションを経て、スライドとハンドアウトを用いたチームプレゼンテーションへと向かいます。2017年度は高校生がグローバルリサーチにてグランプリと奨励賞を、中学生が企業インターンで優秀賞を受賞しました。

中1と中2の全員が取り組むペアワーク「SCIENCE COMMUNICATION PROGRAM」では、ペアで互いにPDCAを繰り返しながら、プログラムを組んで、ロボットを自律行動させます。同じプログラムを組んでもロボットの部品の摩擦消耗で動きに違いが出るので、2人のコミュニケーションが大切になります。

こうして、「いつでも、どこでも、誰とでも」協力・協働し合える力を養う一方で、個々の力を伸ばしていくための特別な講座や、補習・補講と自習環境の整備にも、聖園女学院は積極的に取り組んでいます。

「MISONO ENGLISH ACADEMY」は、昼休みや放課後に、ネイティブの英語教員と歌やゲームなどを楽しみながら、リスニングやスピーキングの力を伸ばす

ための部屋です。iPadを使って英語でミニプレゼンをしたり、ショートムービーを作成したりすることもできます。部活とも両立でき、グループレッスンが中心ですが、希望により個人指導もしてもらえます。

「ACE After School」は、帰国生を含む英語上級者対象の英語の授業（「ACE＝アドバンストクラス オブ イングリッシュ」）を、希望者が体験できる放課後の取り組みです。all in Englishの授業形態で、リーディング、ライティングを中心に、リスニング、スピーキングも含めた4技能をバランスよく向上させます。留学後の英語力維持にも役立ちます。

このほかに、今後、校長のカルマノ先生をはじめ、聖園女学院の先生方が、さらに充実させたいと考えていることがあります。

「海外プログラムのブラッシュアップ、学内の施設・環境の整備、そして教育環境の多様化（＝ダイバーシティ化）などですね。これらをどう充実させるかが今後の課題だと考えています」と下里先生。

「いま、コスタリカからの留学生が本校に通っていますが、生徒同士はつたないながらも英語と日本語、スペイン語を織り交ぜて使いながら、ごく自然にコミュニケーションをとっています。こういう教育環境が、生徒に与える良い刺激や影響をもっと生かしていけると良いと思っています」と鐵尾先生も言います。

「もともと『カトリック』とは、「すべてを含む」という意味です。ですから、カトリック校である聖園女学院が、そういう教育環境をつくることは、創立の理念にかなっています」とカルマノ先生。同校の資料に掲げられている「教育目標」には、「神様がいかにか世界の一人ひとりを、かけがいのない存在として大切にされているかを教えます。神の子として国を超え、文化を超え



Misono English Academy



英語の空間「MISONO ENGLISH ACADEMY」では、ネイティブ教員とともに英語に浸ることができる！

て互いに理解し合い、人類の平和と福祉のために尽くすことができる女性を育成します」と明記されています。

従来の「4科・2科」の入試に加えて「総合力入試」、「英語入試」も導入。多様な受験生に門戸を開く

こうして、一人ひとりの存在を、かけがいのない宝物として大切に育ててきた聖園女学院は、第1志望で受験しにくる生徒の割合がとて高い学校でもあります。そういう受験生にとって受験しやすく、合格できるチャンスを増やせるように、同校では、2月1日から短い期間での午前・午後の入試日程を基本としてきました。

しかし、2017（平成29）年の入試からは、いわゆる新タイプ入試である「総合力入試」を、翌2018年には「英語入試」を、神奈川エリアの他の私学に先駆けて新設し、多様な生徒を受け入れるための入試の門口を広げています。

来春2019年入試では2月1日午後に行われる同校の「総合力入試」について特筆すべきことは、採点にあたっての評価基準が問題用紙中に明記されていることです。この基準を意識しながら過去問題に取り組むことが、今後の大学入試にもつながる、学習の指針として役立つことと思います。

関心のある受験生と保護者は、ぜひ一度、学校を訪ねてみることをお勧めします。